

平成 30 年 5 月 25 日
福岡管区気象台

九州・山口県の気候の長期変化傾向と将来予測を公表

～21 世紀末は猛暑日が約 28 日増加、非常に激しい雨の頻度は約 2 倍に～

九州・山口県では、地球温暖化などの影響により年平均気温が 100 年あたり 1.69℃の割合で上昇し、猛暑日の年間日数や非常に激しい雨の年間発生回数は増加する傾向がみられています。さらに、将来予測でも、21 世紀末は 20 世紀末と比べて、年平均気温は約 4.0℃上昇し、猛暑日は年間約 28 日増加、非常に激しい雨の年間発生回数は約 2 倍に増える予測となっています。

福岡管区気象台では、今年の天候等の特徴やその要因と長期変化傾向の実態などを「九州・山口県の気候変動監視レポート 2017」にまとめ、ホームページで公表しました。

https://www.jma-net.go.jp/fukuoka/kaiyo/chikyu/repo2017/repo2017_download/repo2017_download.html

併せて、九州・山口県の 21 世紀末頃の気候予測について各県ごとに解析し、「九州・山口県の地球温暖化予測情報第 2 巻」としてホームページで公表しました。

https://www.jma-net.go.jp/fukuoka/kaiyo/chikyu/report/yosoku/yosoku_download.html

主な掲載内容は別紙をご覧ください。

「九州・山口県の気候変動監視レポート 2017」と「九州・山口県の地球温暖化予測情報第 2 巻」が、地球温暖化問題への理解の促進、九州・山口県の行政機関や地方自治体等が行なう地球温暖化の影響評価や適応策等に活用されることを期待しています。

問合せ先：福岡管区気象台気象防災部地球環境・海洋課 風間
電話：092-725-3613 FAX：092-761-1726

「九州・山口県の気候変動監視レポート 2017」の主な内容

◎九州・山口県の長期変化傾向

平均気温

- 年平均気温は、長期的には100年あたり1.69℃の割合で上昇している。

真夏日、猛暑日、熱帯夜、冬日

- 真夏日、猛暑日(図1)、熱帯夜の年間日数は増え、冬日の年間日数は減っている。

大雨、短時間強雨

- 梅雨期(6～7月)における日降水量100mm以上の大雨の日数には、長期的に増加傾向がみられる。
- 1時間50mm以上の非常に激しい雨(図2)、1時間80mm以上の猛烈な雨の年間発生回数には、長期的に増加傾向がみられる。

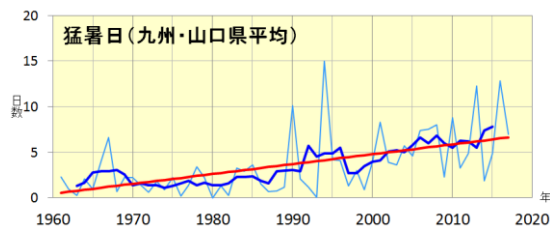


図1 猛暑日の年間日数の経年変化
(九州・山口県平均)

統計期間:1961～2017年。青の細線:年々の値、青の太線:5年移動平均、赤の直線:有意な長期変化傾向。

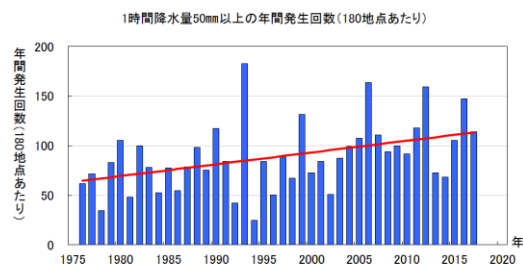


図2 1時間降水量50mm以上の年間発生回数の経年変化

統計期間:1976～2017年。アメダス地点数(180地点)あたりの回数に換算。青の棒:年々の値、赤の直線:有意な長期変化傾向。

「九州・山口県の地球温暖化予測情報第2巻」の主な内容

～高度の温室効果ガスの排出が続く場合¹の予測結果～

◎20世紀末（現在気候：1980～1999年）と比較した21世紀末（将来気候：2076～2095年）の予測結果

平均気温

- 年平均気温は約4.0℃上昇する。

真夏日、猛暑日、熱帯夜、冬日

- 真夏日は年間約63日、猛暑日は約28日（図3）、熱帯夜は約62日増加し、冬日は約24日減少する。

大雨、短時間強雨、無降水日数

- 大雨や短時間強雨の発生頻度は増加し、1時間50mm以上の非常に激しい雨の年間発生回数は約2倍に増える（図4）。一方で、無降水日数も増加する。

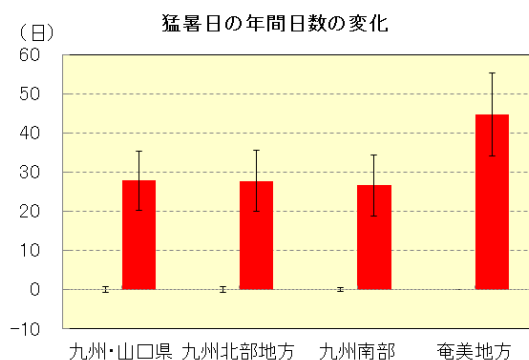


図3 猛暑日の年間日数の変化（将来気候と現在気候との差）

棒グラフは将来気候と現在気候との差、縦棒は年々変動の標準偏差（左：現在気候、右：将来気候）を示す。

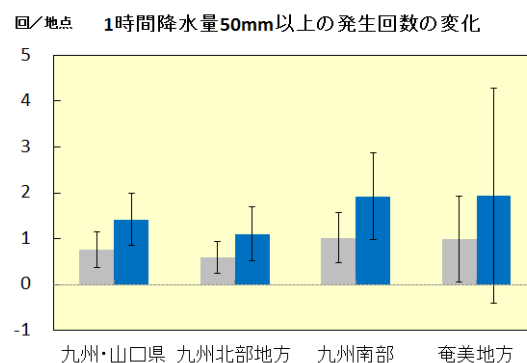


図4 1時間降水量50mm以上の年間発生回数の変化

棒グラフは現在気候（左：灰色）、将来気候（右：水色）における1地点あたりの年間発生回数、縦棒は年々変動の標準偏差を示す。

¹気候変動に関する政府間パネル（IPCC）第5次評価報告書で用いられた4つの温室効果ガスの濃度変化シナリオのうち、最も温室効果ガスの排出が多いシナリオ。